

平成十二年十一月十一日 和敬塾シンポジウム

## 「現代家族における愛と責任」

実践女子大学生活科学部 教授 平原日出夫先生

### ■はじめに

みなさん、こんにちは。私はNHKで三十年間、番組づくりをやりまして、現在は実践女子大学で映像文化論やマスメディア論、映像制作論というものを女子学生に教えております。

かつて、私がNHKに入ったころは、ちょうどテレビが爆発的に膨張した時期でした。3チャンネルのNHK教育テレビが始まったときに、私はその要員として入りました。そのときNHKでは千人以上の職員を募集したので、私はそのどさくさに紛れ込んで入社しました。早稲田大学が試験会場として、なにしろテレビの膨張期でしたから、応募者が何万人か来たといわれています。つまり一番爆発的な瞬間に、私はテレビの世界に入っていました。

そのときの試験問題はたしか「テレビの世界での抱負」という八百字の論文でした。今でも思い出せるのですが、私は映像の送り手と受け手の視聴者との掛け橋になりたいということを書き、ちやうど八百字の原稿を二字余して書き終

えました。それで口頭試問のときに、大先輩に

「おまえの論文はよかったぞ」と言われました。なぜこんな話をするかというと、皆さんもこれから就職試験があるでしょう。大事なものは、学科試験よりも論文テストです。メディア関係は特にそうで、やはり文章力が重要です。普段いろんな本を読んでいく。それから論理性。それが流れを持った文章であればうまくいきます。私も、それでやっと入ったんだなと思えました。学科試験なんていうのは、そんなに出来ているわけでもなかった。きつと学科試験ができた人はもつと大勢いただろうけれども、論文でうまくいったのだと思います。これは皆さんのご参考までに。

さて、みなさんのお手元に年表がございますね。それをごらんになってみてください。テレビというのは、ご存じのように一九五三年に始まるわけです。一九五三年といえますと昭和二十八年です。そして、最初は八百六十六件の契約数しかないのが、瞬く間に倍々ゲームのよう

に伸びていったんですね。

それで昭和三十年にすぐれたテレビドラマが出てくるわけです。お手元の資料を説明します。左側はテレビドラマ、中央がニュースとかドキュメンタリーの報道です。NHKは大体、報道、教育部門、それからテレビドラマなどを含めたエンターテインメントの領域、この部門からなるわけです。一番右側はその時々々の社会的出来事です。

私はテレビドラマ部に一貫しておりましたので、表の左側に、民放、NHKを含めてのすぐれたドラマを挙げてみました。この中に昭和三十四年の「日本の日蝕」というのがありますね。「いろはにほへと」TBS。それから昭和三十三年「私は貝になりたい」という有名なテレビドラマがあります。これは本当にテレビの地位を高めたドラマなんです。それまで、テレビドラマは「電気紙芝居」といわれて、映画とか演劇に比べて一段も二段も低いものとバカにされていたのです。

テレビ放送小史

	《テレビドラマ》	《ドキュメンタリー、ニュースほか》 28年 ジェスチャー (NHK)	《社会・事件ほか》 ・テレビ放送開始 (28) ・テレビ受信契約866 ・洞爺丸事件 (29)	
昭和30年代	30年 追跡 (NHK) 東京・大阪の初4元中継	30年 私の秘密 (NHK)	・ソ連、初の人工衛星スプートニク打上げ (32)	
	31年 どたんば (NHK) 東芝日曜劇場 (TBS)	32年 日本の素顔 (ドキュメンタリーの草分け、NHK)	・テレビ受信契約100万 (33)	
	33年 私は貝になりたい (TBS) マンモスタワー (TBS)	33年 VTRを初めて使用 (大阪テレビ)	・皇太子ご成婚式 (34)	
	34年 いろはにほへと (TBS) 日本の日蝕 (NHK)	34年 山の分校の記録 (NHK)	・テレビ受信契約200万 (34)	
	ママちよつときて (NTV)	35年 安保報道 (国会乱入、ハガチー事件、国会強行採決など) 兼高かおる世界の旅 (TBS)	・日米安保条約締結 (35)	
	35年 青春の深き淵より (フジ)	37年 ノンフィクション劇場 (NTV)	・浅沼社会党委員長暗殺 (35)	
	36年 七人の刑事 (TBS) 娘と私 (NHK)	37年 老人と鷹 (NTV)	・テレビ受信契約1000万 (37)	
	37年 てなもんや三度笠 (朝日放送) 判決 (NET) マンモスタワー (フジ)	38年 新日本紀行 (NHK)	・ビデオリサーチ社設立 (37)	
	38年 正塚の婆さん (TBS) 魚住少尉命中 (NHK)	39年 現代の映像 (NHK) ひよっこひょうたん島 (NHK) ある人生 (NHK) ドキュメンタリー劇場 (フジ)	・ケネディ大統領暗殺 (38) (初の宇宙中継)	
	39年 恐山宿坊 (NHK) 赤穂浪士 (NHK)	40年 ベトナム海兵大隊戦記 (NTV) 11PM (NTV) スタジオ102 (NHK)	・テレビ受信契約1500万 (38)	
	七人の孫 (TBS) たたいま11人 (TBS)		・吉展ちゃん誘拐事件 (38)	
	40年 太閤記 (NHK)		・東京オリンピック (39)	
	昭和40年代	41年 おはなはん (NHK) 横堀川 (NHK) 氷点 (NET) 若者たち (フジ)	41年 NNN ネットワーク (NTV系19社) FNN ネットワーク (フジ系5社) ウルトラマン (TBS)	・羽田・富士など相つづ航空機事故 (41)
42年 鳥が… (TBS) 白い巨塔 (NET)		42年 現代の主役一日の丸 (TBS) ハノイ・田英夫の証言 (TBS) 《偏向番組論議》	・テレビ受信契約2000万 (42)	
43年 肝っ玉かあさん (TBS)		43年 明治100年開港番組	・NHK受信料カラー契約 (43)	
44年 碑 (広島テレビ) 細うて繁盛記 (YTV) 月火水木金金 (朝日放送)		44年 人類、月面着陸宇宙中継	・東大紛争 (44)	
45年 時間ですよ (TBS) ありがとう (TBS)		45年 苦界浄土 (RKB毎日) Uボートの遺言 (NHK) 70年代 われらの世界 (NHK)	・万国博・大阪 (45)	
46年 さすらい (NHK) 天皇の世紀 (朝日放送)		46年 成田闘争 (各社報道)	・日航よど号ハイジャック (45)	
47年 必殺仕掛人 (朝日放送)		47年 連合赤軍浅間山荘事件テレビ中継	・三島由紀夫事件 (45)	
48年 それぞれの秋 (TBS) 国境のない伝記 (NHK)		48年 石油危機を集中報道	・沖繩本土復帰 (47)	
49年 真夜中のあいさつ (TBS)		49年 ニュースセンター9時 (NHK)	・札幌オリンピック (47)	
50年 欧州より愛をこめて (NTV)			・日中国交正常化 (47)	
昭和50年代		51年 紅い花 (NHK) となりの芝生 (NHK)	51年 NHK特集始まる	・テレビ受信契約3000万 (57)
		52年 岸辺のアルバム (TBS) 毎日が日曜日 (NHK)	52年 《教育テレビ全カラー化へ》	・大韓航空機墜落事件 (58)
		53年 事件 (NHK)	54年 「戒厳指令」 交信ア傍受セヨ (NHK)	・NHK衛星放送試験放送 (59)
	54年 3年B組金八先生 (TBS)	55年 シルクロード (NHK)		
	55年 あ・うん (NHK) 四季〜ユートピアノ (NHK) ザ・商社 (NHK)	56年 《放送大学学園発足》		
	56年 川の流れるバイオリンの音 (NHK) 夢千代日記 (NHK) おんな太閤記 (NHK)	57年 地底の葬列 (北海道放送)		
	57年 終りにみた街 (テレビ朝日)	59年 《放送衛星ゆり2号a打ち上げ》 核戦争後の地球 (NHK特集) 死者たちの遺言 (山口放送)		
	58年 おしん (NHK) 積木くずし (TBS) 波の盆 (NTV) ふぞろいの林檎たち (TBS) 金曜日の妻たちへ (TBS)	60年 日米開戦不可なり (NHK) 海を渡った花嫁たち (テレビ東京)		
	59年 春・音の光 (NHK) くれなゐ族の反乱 (TBS)	61年 絆 (きずな) 一高校生とヒロシマ (NHK) 広島	・筑波科学万博 (60)	
	60年 イエスの方舟 (TBS)	62年 ミツコ・二つの世紀末 (NHK) 世界の	・日航ジャンボ機墜落 (60)	
	61年 「海も暮れさる」 (NHK)	中の日本「土地は誰のものか」 (NHK)	・三浦和義逮捕 (60)	
	62年 親子ジグ・ザグ (TBS)	63年 遅すぎた聖断 (沖繩放送)		
	63年 虹のある部屋 (NHK) 海の群星 (NHK)		・衛星24時間試験放送開始 (62)	
			・民放、地上波24時間放送 (62)	
			・天皇崩御 (64)	

「私は貝になりたい」は四国高知県の床屋の主人豊松が、戦争中、上官の命令でアメリカ軍の捕虜を銃剣で突き刺し殺してしまいます。戦後、アメリカの軍事裁判にかけられてしまうわけです。「私は上官の命令でやったんだ」と訴えても駄目なのです。軍事裁判で、「なぜあなたは上官のその命令を断らなかつたのか」と追求される。けれども日本の軍隊では、上官の命令は天皇の命令に等しく、絶対ですから、それを拒むことはできない。アメリカの軍事裁判の場では、そういう日本的な論理は通用しません。

そこで、ドラマの最後で豊松が絞首刑になるわけです。彼は家族にあてて、「今度生まれてきたときには、私は人間なんかにはなりたくない。そうだ、海の底の貝になりたい」と遺書に綴ります。刑場の十三階段を上って絞首刑にかけられて死ぬわけです。そのドラマは、鉄の扉がズシーンと閉じられて、おしまいになります。このドラマは大きな感動を巻き起こします。このときは、テレビの台数は昭和三十三年で五十万台ぐらいまで増えていました。

社会的な事件ともいえるような反響が新聞の投書欄に現れてきます。そのとき慶應義塾の中学生の投書が非常に印象的だった。それは「私は貝になりたくない」という題の投書でした。その投書がまた評判になりました。「テレビドラマを見てつくづく私は考えさせられました

た。でもやはり私は貝になりたくない」という中学生らしい純粋な気持ちがありました。

テレビが深い感動を呼び起こし得るものがあり、テレビドラマは単なる電気紙芝居ではなく、もしかすると映画や演劇よりもはるかに広い、大勢の大衆に訴えかけられる有効なメディアかもしれないということが、そのころからだんだんと認知されてきたわけです。

そして、私がNHKに入ってから間もなく、テレビ受信契約はすぐ百万台、二百万台というふうになり、年々伸びていきました。昭和三十九年の東京オリンピックのときに、受信契約が千七百万に達しました。昭和四十年代に入って二千万と、どんどんふえて、現在、受信契約数三千五百万と言われています。その辺が日本の人口でいえばリミットでしょう。

テレビというのは、今日マスメディアとして、よくもあしくも大量伝達の最大のメディアです。誤ったニュースやメッセージを送れば、それだけ社会的に大きな影響がありますけれども、いいメッセージを送り出せばすぐれた伝達メディアであるということは言えますね。

私は、さつき冒頭に申し上げたように、まだ若かったし、受け手と送り手の掛け橋になりたいというつもりで入ったんですけれども、テレビがまだ青春の時代に、私以外にも同じような気持ちの人がいっぱいいたでしょう。けれども、

三十年経過していくうちに、私はテレビの持つ怖さとか、それからテレビの送り手が、みんな最初に抱いていた熱い情熱みたいなものがだんだん薄れていったように感じます。

テレビというメディアは出来てから五十年になろうとしています。テレビが成熟していく中ですぐれた人はもちろんいますけれども、現在、テレビは非常に危ういところに来つつあるのではないかなというのが実感です。

そして、きょうは、私が長く携わってきたテレビドラマについてお話していききたいと思います。

先ほどお話しした「私は貝になりたい」の最後のところですが、主人公豊松が「私は人間になりたくない、貝になりたい」と言って、十三階段を上っていき、最後、上り詰めたところで、扉がバタンと閉まる映像で終わりますが、その音がズシーンと重くひびいて終わる。もちろん首が絞まる絵なんてありません。象徴的な表現として、そこで主人公の死を意味しているわけです。その終わり方は大変印象的でしたが、じつはこれにも先例があるのです。

#### ■イブセン『人形の家』と現代

ところで、皆さん、『人形の家』という戯曲をご存じですね。十九世紀のイブセンというノルウェーの作家が書いたドラマです。それがな

ぜ今日でも有名なのか。日本を含め世界中で有名です。岩波文庫で出ており、二時間ぐらいで読めますから、暇があったらお読みになつてくたさい。大変すぐれた作品です。近代古典といえる作品です。

どういう話かというと、最後は、ノラという女主人公が、夫と三人の子供を置いて家を出ていく話です。夫はとどまってくれ、このうちに残ってくれと懇願しますが、ノラはそれを振り切って出ていきます。

その最後のところで、「私たちの夫婦の共同生活が、真の結婚生活になるようなことになれば、そういう時代が来たならば一緒に暮らしましょう」と言って出て行きます。つまりノラは夫に失望したのです。絶望して「さようなら」と言って出ていくわけです。では、なぜ失望したのか。

二時間ほどの芝居ですけれども、ドラマの始まりは明るく晴れたクリスマスの午後です。第一幕は、ノラの夫ヘルメルが、一週間後のお正月には銀行の頭取になることがもう決まっています。弁護士だった夫が、今までいろいろと不如意で生活も十分じゃなかったが、やっとこれでお金持ちになり、財産も持てるということで開放感を感じている場面です。ノラは、まだびちびちとした、三人の子持ちといってもチャームングな愛くるしい奥さんです。夫は彼女のこ

とを、ヒバリちゃんとかリスちゃんとか呼んで愛している。

ところが、そこへ一人の男がやってきて古い証文を見せる。ノラはその証文を見てぎくつとする。かつて夫が病気で転地療法をしなくてはならなかった。北欧は寒いので、夫が回復するためには南イタリアか、南フランスへ転地したほうがいいわけです。そんなお金はないから、ノラはお金を金貸しのその男から借りるわけです。ノラはお父さんの名義を使って独断で借りてしまうわけです。自分でお父さんのサインをします。つまり偽署です。お父さんはその前にすでに死んでいるのです。

男は、その古い証文を持ってきて、「この証文は偽署である。だからこれを表に出したら犯罪になる。けれども自分を銀行に就職させてくれれば公表しない」とノラを脅します。つまり、あなたの夫は銀行の頭取になるんだから、自分を取り次いでくれと要求します。さあ、困った。ノラはそういうことを夫になかなか口に出せない。そこで、ノラは最悪の事態を覚悟します。夫は自分のことを最愛の妻と言っている。社会が、私をにせのサインを書いた、罪を犯したと行って攻撃するだろう。そのとき夫はすべてをなげうって、自分をかばって世間の矢面に立つてくれるだろう。そうなったら自分は自殺しよう、夫にそんな迷惑をかけたくない、とノラは

死を決意します。

ところが、その予想とは全く反対の事態が起きてくる。すべてを知った夫は、自分をかばってくれるところか、「おまえは遊び人の自堕落な性質をお父さんから受け継いでいる。一切の責任はおまえにある」と言つて奥さんを責めるわけです。自分の社会的な信用が失墜するのを恐れて、妻をかばおうとしないのです。

その瞬間、ノラには一切が分かりました。何だ、夫は口先で自分を愛していると言っただけで、本当に自分を愛していたのではなかったのだ。私たちは八年間暮らしたけれども、人間らしい突っ込んだ通い合いもなかった。私はお父さんにかわいがられた人形みたいな存在だった。それがもう一人の別な男、ヘルメルという夫に人形のように譲り渡されただけだったと認識するわけです。そしてノラはこの偽りに満ちた家を出ていく決心をするわけです。

ヘルメルは、ノラに出ていかれては大変だから、取りすがって、出ていかなくてくれと哀願します。けれども、そのときノラは決然と一人の女性として出て行くわけです。「私たちの夫婦の共同生活が、真の結婚生活になるようなことになれば、そういう時代が来たならば一緒に暮らしましょう」と言い残して出ていくわけです。

イブセンは、今日の男女共同参加型社会の到

来をあたかも予知していたみたいですね。これは十九世紀の物語です。何だ、十九世紀の物語じゃないかと言うけれども、いま言った男女共同参加型社会というのは、百年後の今、我々の現実の話題になっているわけですね。結婚という問題にしても、百年たった今も、本当の意味で男女共同参加型社会ではないし、その意味では二十世紀の我々の家族というものもきわめて不完全であると思います。

ですから、家族の問題は、皆さんが大学を卒業して、恋人ができて結婚すると、すぐそこにある大きな問題ですね。そういう皆さんの前で、きょうはタイトルとしてはちよつと仰々しいようですけれども、「現代家族における愛と責任」という問題で少し話してみたい。それはやがて皆さんの現実の問題となると思うからです。

#### ■向田邦子『家族熱』の家長

ところで『人形の家』は一八七九年に書かれました。そのちよつと百年後の一九七八年に、向田邦子さんが『家族熱』というドラマを書きました。向田邦子さんは最もすぐれた日本のテレビドラマ作家の一人です。向田邦子さんという名前だけは聞いたことがある人、ちよつと手を挙げてみてください。そうですか、皆さん、ご存知のようですね。向田邦子さんが、この『家

『家族熱』を書いたのがちょうど『人形の家』の百年後です。これについてお話ししていきます。

これはどういう作品なのか説明しましょう。

『人形の家』では、夫はノラと一緒に暮らしていくに値しない、そういう家長であり、張り子のトラみたいな家長だということが、一瞬にしてぱっとわかってしまいます。もうこれは一緒に暮らすに値しない夫だと判断して、ノラはうちを出ていくわけですね。ノラは未来に本当の真実の愛を求めていったわけです。

それに対して、向田さんの『家族熱』というドラマは、十三年前に、姑との衝突があつて、それは三歳になる光子という娘を肺炎で死なせた責任をとって、恒子という女性が出ていくわけです。当時十二歳と、五つの兄弟も残り、夫も残して、舅と姑のいる黒沼家を出ていくわけです。恒子は今は四十八歳です。

一方、黒沼謙造という家長は建設会社に勤めていて、現在は建設部長をやっています。そして若い、三十三歳の朋子という女性と再婚しているんです。謙造は五十歳で十七歳も違う。自分の娘といつてもいいくらいで、若くて美しい。その役は浅丘ルリ子さんがやりました。

第一回目は、平和な黒沼家の朝が描かれます。ある日、夫の謙造の会社に先妻の恒子から「お久しぶりでございます」と電話がかかってくる。恒子は、今は大阪の料亭の仲居をしている。

仲居さんというのは、お客さんの座敷にお料理を運んでいくわけです。高級な料亭ですから、お金持ちとか会社などの責任ある立場の人が接待に使うところですが、恒子は建設公団の重役の宴席で、夫の会社の名前が出てくるのを耳にする。そして、その建設部長の黒沼謙造という名前も出てくる。はつとする。かつての自分の夫ですから。

そして、いろんな重要な情報をキャッチしてしまうわけです。それをぜひ昔の夫に知らせたいと思った。動機は純粋に、かつて自分と一緒に暮らした夫のためを思って、こんな情報をキャッチしました、と電話をします。

そして、謙造はその情報に飛び乗ってしまうわけです。そこからすべての問題が始まります。昭和五十年前後のことですから、高度成長の華やかな時代です。典型的な会社人間で、エコノミックアニマルの謙造はその情報に飛び乗ってしまう。そして建設公団の贈賄工作を始める。そして自社の入札を有利に導く。その入札も謙造の会社が取ってしまうわけです。

恒子は大阪から東京へ出てきて、渋谷にバーを開きます。自分のお店を舞台にして、建設公団の重役と夫とを引き合わせます。賄賂工作の場に提供するわけです。大きな橋梁建設を謙造の会社が落札します。

謙造は、それによって建設部長から重役に昇

進みます。会社人間としては順調な出世を遂げる。目的のためには手段を選ばない。けれども、そのことが発覚して警察の知るところとなり、謙造は逮捕されます。そしてやがて保釈される。

しかし、後妻の朋子も先妻の恒子と夫が逢っているということがわかって、うちを出ていく。やがて恒子の発狂が始まります。なぜかという、恒子は昔の夫と息子を今も愛して忘れてられない。やはり一緒に暮らしたい。けれども、夫は後妻の朋子と分かれることはできない。そういうごたごたの中で、朋子も家を出ていき、先妻恒子の精神の異常はさらに進んでいきます。つまり、黒沼家は悲劇の土壇場に追い込まれていくわけです。家庭崩壊していくわけです。その悲劇は「お久しぶりでございます」という一本の電話から始まったわけです。急坂を転がるように崩壊していく。ちょうど昭和五十年代初めのドラマです。日本の高度成長期のほぼピークの、高度成長が物質的にも所期の目的をほぼ達成していく時代です。バブルの崩壊はその十年後にやってきますから、『家族熱』は高度成長のピーク時の物語です。

それは同時に日本社会の世相の縮図でもあるわけです。今日、いろいろな企業の不祥事が相次いでいます。それは企業はかりではない。官界もそうだし、どこでもそうですね。戦後、そういう精神的なモラルが問われ続けてきて

います。

これまで、女性は長い間、男性上位の社会の中でいつも男性の下風に置かれ、うめきながら生きてきたわけです。向田邦子さんは女性作家ですから、そういう中で女性の結婚とは何か、結婚生活とは何かということ、特に戦後の女の生き方を描き出していったわけです。そこに彼女に対する人々の中広い共感とがあつたと思われまます。

これは、先ほど申し上げましたけれども、『人形の家』では、主人公ノラは家を出て行って本当の幸せを家庭の外に求めていく。そして時間的には未来に求めていく。それに対して、この『家族熱』では、本当の幸せを主人公恒子は過去に、十三年前かつて夫や子供たちと一緒に暮らした過去の中に自分の幸福を求めていったわけです。時間的には、過去に戻る。ノラは、真の幸せをファミリーの外に求めたが、恒子は家族の内側に求めていくわけですね。だからノラと恒子とは全く対照的です。

この辺は、私は向田さんが計算していたのではないかと思ひます。向田さんが『人形の家』を読んでいないはずがありません。『人形の家』からちようど百年後に、向田さんが、ノラと全く百八十度違ふかたちで恒子という人物を設定し、意識的にこの作品を書いたのではないかと思ひます。二十世紀の後半というのは家族と

いう問題が非常に問われている時代ですから。ノラを全く百八十度転回させたところに、今日の家族の問題、女の生き方を描こうとしたのではないかと私は考へております。

もう一つ気になることは、この黒沼家の三歳の女の子が肺炎で死んだのは、夫の黒沼謙造がバンコクへ一年出張していた時でした。恒子はその留守の家庭を守っていた主婦だったので。そうすると、恒子は主婦として、子供たちの育児と姑さんの世話とかいろいろと気を使ひうわけです。時には息抜きをしたい。それである晩、恒子は学校時代の友達のうち泊まってしまう。その日は嵐でした。そして帰ってくるのが遅れた。その日、娘の部屋の高窓が開いていたために、娘の光子のベッドに雨が吹き込んで肺炎にかかってしまいます。お母さんが外泊して遅れて帰宅したために、処置が遅れ、それが原因で娘は死んでしまいます。それを姑さんが一方的に嫁を責め、その責任をとって恒子は家を出ていったのです。

そのとき夫もバンコクからすぐに戻っていませんし、祖父もまだ五十九歳ぐらいで元氣です。夫もまだ三十七歳です。つまり元家長と現家長の二人の家長がいる。重要なのは、自分の女房が、二人の男の子がいる恒子が、いびり出されるように出ていくのを夫が黙って座視していたことです。黙過したのです。黙って見過ごし

たという意味です。引き留めようとしなかつた。恒子は、夫も子供も好きだったので。でも子供の責任を取るといつて出て行つた。恒子は嫁姑のどろどろの争いは嫌だったのでしよう。

そして必死に生きようとしたけれども、世の中で、四十近い女が一人で生きるといつてもなかなか大変です。働いた先が料亭。元文学座の加藤治子さんという女優さんが恒子役を演じたのですが、恒子は美しい女性ですから高級料亭の仲居さんになるといつのはいわば必然です。そういう水商売の仕事をするけれども、彼女の中には子供恋しさ、夫恋しさがある。

特に女性の場合は、子供という存在は、特別です。これは皆さんのお母さんも皆さんのことをそう思っているでしょう。恒子は夫とはけんか別れして出ていったわけではありませんから、やはりお座敷で聞いた情報を夫に聞かせようと思つのもある意味で、必然でしょうね。そこをやはりエコノミックアニマルとしての謙造が飛びついてしまったことにも問題があるのですけれども、これもいわば半分うなずけるところがある。つまり、こうしてこの家族の悲劇が起きてしまった。

そこで、私が気になるのは、妻と一緒に暮らしてきた家長謙造は、姑さん、つまりおばあちゃんの言葉に唯々諾々と従ひ、それから元家長の祖父も、なぜ嫁を引き留めようとしなかつた

のか。ここがこの『家族熱』という作品の最大の疑問点です。この点にこの作品の傑作である理由、秘密が潜んでいると思われれます。

この家長二人は黒沼という家をはつきりと選択したのです。恒子という人間よりも黒沼家という「家」を優先させた。結果として、嫁ならば別の人間で変更可能であり、かわって来たのは若く美しい朋子という女性でした。

黒沼家の子供たちは立派に成長して、兄は二十六歳の青年医師、弟は大学生。長男は自分らを捨てていった母親に対して憎悪を持っていて。自分たち子供を捨てていった母親に対して憎しみを持っている。そして義母の若い朋子に恋心を抱いている。二十六歳と三十三歳では、あまり年が違わない。若い恋人同士みたいな関係です。

けれども、実は恒子にはこころの秘密があったのです。本当は、高窓を嵐の晩あけつ放しにしたのは長男だったのです。また十一歳か十二歳で、嵐の夜、妹の部屋で遊んでいた長男は高窓を閉めるのを、つい忘れて自分の部屋へ行ってしまった。母親が帰ってきたとき、長男は寝ぼけ眼で、「僕が窓を閉め忘れたんだ」と告白します。それを慌てて恒子は、「いいから早く寝なさい」と言って、布団へ寝かしつけます。長男の頭から自分がやったという記憶をぬぐい消すために、私が窓をあけたんだ、私がいけ

なかったんだ、私があけつ放しでうちを出たんだと、母親恒子が一切の罪をひっかぶって、家を出ていったのです。

そういう大芝居を打てば、家族みんなが「ああ、そうか」「そうだろう」と思い、長男も、「ああ、お母さんか」と思い、だんだん時間がたてば自分ではないと思うようになる。恒子は、そういう大芝居を打つ必要がどうしてもあると思ったのです。もし長男がそのことをよく覚えていて、妹を自分の過失で死なせてしまったという罪の意識を持ちつづけたら、長男は一生苦しむだろう、一生苦しんではかわいそうだという母親の親心です。それで自分が積極的に長男の過失をひっかぶって家を出ていったのです。

しかし、家を優先する家長たちは、そういう母親の子供に対する真実の愛情には気づかず、見過ごしてしまつた。あきらかにそこには、家長として女房の出でいくのを見殺しにした責任があると思います。

それは、『人形の家』ではありませんけれども、世の中にヤバイこと、—そういう言葉を使いますけれども—ノラがにせのサインをしたことが世間に知れば、夫ヘルメルの社会的な信用は落ちてしまう。そのことを恐れて女房を責めたように、ヘルメルは責任逃れをしたわけです。同じことがやはり謙造にも言えるのではないでしようか。

それともう一つ、私が今ここで思ったことですけれども、姑さんだつて、やはり同じ家にしたのだから光子の死に対して責任がある。だから、恒子は家を出ないで嫁姑の対決を最後までやれば、家族崩壊の悲劇は避けられたと思うのです。

とにかく家長たちはそういうことを知ろうとしなかった。大体、日本の家長というのは、うちのことは全部女房に任せて、あとは知らない、頼むよ、そういうところがある。

結論として、謙造には家長不在の責任がある。やはり黒沼家には家長というものは不在だったのではないか。同様に『人形の家』にも本当の意味での家長が不在だった。責任回避をした夫、ノラのいた家には本当の意味での家長が不在だったということ。その意味では『家族熱』と『人形の家』とは、根底ではつながっているものがあります。

先ほど申し上げましたが、『家族熱』は構造的にも『人形の家』を百八十度転回させたところで設計された作品であると思われれます。『家族熱』というドラマを設計することによって、作者は二十世紀後半、一九七八年当時の日本社会の家長のあり方、家長不在の日本の社会というものを描き出そうとしたものと考えます。

そこで、いま言った家長の不在というのが、単に黒沼家あるいはノラの家の特異な現象で

はないのではないか。作者が昭和五十三年にこのドラマをつくったということは意味があるのではないかと思えます。戦後の高度成長が昭和三十年に始まり、やがて日本が高度の経済的繁栄を遂げていく。そういう時代の中で、日本の家族について絶えず言われていたのは、家長の不在という問題です。戦後は女と靴下が強くなったと言われ、そんな中で、家長というものの影が非常に薄くなっていく。家長という言葉は、日本の旧憲法の中の家長権という言葉を通して想させます。日本では男性上位の社会がつい昭和二十年まであったわけですよ。

けれども、日本の新憲法によって男性、女性が平等である時代に、そして戦後社会は、特に家長というものが力のない存在として言われ続けてきました。それと同時に、日本の家族は、みんな子供にいい顔をする、優しい顔だけしていればいいという風潮が生まれ、そこからいろいろな弊害が指摘されてきています。そういう社会でいいのだろうかということが、絶えず言われ続けてきました。つまり日本の戦後家族から家長という存在はいなくなるといわれています。

家長というのは、家族に対する愛情と同時に、家族に対する責任というものを持つ存在として位置づけられるわけで、そういう家長が戦後いなくなりました。

政治を初め今日の日本のさまざまな社会機構にも、そういう責任の所在というものが欠落しております。そこに日本の家族の危うさ、同時に日本の社会の危うさがあります。家長の不在ということは、同時に日本の社会の危うさにつながっていく問題だと思われまます。

皆さんは、二十一世紀の、まさにこれから家族をそれぞれに持ち、そして日本の社会を中心にのびのびと生きていく人々です。こういうドラマの中の真実を読みとってほしいと思います。百年前のイブセンの作品は現在でも立派に語り得るような人間性の真実が描かれています。こと家族という問題でいえば、自分が結婚して家族を形成していく場合、それは妻との共同でつくり上げていく家族でありましょう。そこには強い責任を伴うものであるということとを記憶していただきたいということです。

#### ■もう一つの「人形の家」

ところで、本日、たまたま週刊誌をここに持つてきています。私はふだん週刊誌はあまり買わないのですが、三田佳子さんの息子さんの覚せい剤問題がテレビでも週刊誌でもしきりに報じられています。実はこの人のお父さんが、NHK時代、私の部下でした。私が銀河テレビ小説という番組のチーフプロデューサーで、彼が配属されてきて一緒に仕事していた仲間な

んです。

私はNHKを辞めて十年以上たちますので、その後、会っていませんけれども、彼はその後だんだん出世して、今はNHKエンタープライズというNHKの下請けではありませんが、NHKの建物の中にある製作会社の重役です。

一方、奥さんは長者番付に四年連続で名前が出てくる、いわゆる大女優です。本当の意味で演技がうまいかどうか、いまは演技論の問題ではないからふれませんが、要するに、世間的な意味での大女優と、世間的な意味での大マスメディアである番組製作会社の重役さんという、庶民から見たら羨ましい夫婦ですね。

けれども雑誌を読んでみますと、元保護司の方が、最初に捕まった二年前に、これはきつと再発するであろうと思ったと言っています。未成年の場合は、ちゃんと保護司がいて、きちっと素行を報告したりするんです。

ところが親も子もやるべきことをやらない。お父さんが親子の対話が必要だと言って息子を連れてカナダへ行つた。そのときも保護司のもとに全然連絡がない。普通、海外へ行くとか、旅行するとかいう場合、保護司の方に届けを出すそうです。そういうところにも大女優と大マスメディアの重役というような人々の意識の中には、「保護司なんて」と軽く見がち意識がどこかにあつたと思えます。



保護司さんは、地区ごとにおりまして、ボランティアで世間的には有名ではないかもしれないけれど、事件を起こした人の相談にのったり指導や助言をしたりするそうです。そういう人たちに報告もしないというのは、どこか軽視したところがあったと思う。長者番付に載ったりとすると、どうしてもおごりがあるものです。マスメディアにいても、人間はおごってはいいんです。私はマスメディアの人間でしたが、「マスメディアがどうした」というくらいに気持ちが悪くはないかと思えます。

考えてみれば、夫婦ともに世間体ばかり気にしているようです。二度目に次男が捕まったとき、父親は記者団の質問に「私は会社の重役会議がありましたから、そちらに出席していました」と言っています。私はそれを聞いていて、彼は、それが言いたいのだなと思いました。

そして記者会見の席では、ネクタイもちゃんとして、記者団を見て、「こんなに早く、記者団の皆さんは朝早くからお出ましいただいて、まことに申しわけございません」。そこまではいいんです。「三田佳子が昨夜、病院にショックで緊急入院しましたので、私が代理として参りました」。何が代理ですか。自分の息子でしょう。代理ではありません。この父親はまだわかっていない。何にも事態がわかっていません。さっきの『人形の家』でいえば、ノラは、私

を愛している夫が、私をかばって、おれがやったんだと世間に向かって言ってくれると思っただ。それが本当の愛だとノラは信じていた。でも実際はそうではなかった。その反対だった。父親としては、妻の三田佳子さんがどんなに有名な女優であっても「私が父親です。すべては私の責任です」というべきだったと思います。代理なんていう言葉は口にすべきではない。私は、どこかでこの父親は逃げているな、と思いました。

つまり、皆さんにはそういう父親になってほしくないということですよ。

父親の会社はどんなに有名でも、奥さんのほうがサラリーマンより何十倍もの所得があるでしょう。NHKのサラリーマンといっても、重役だって、たかが知れていますから。

だから、いつの間にか、あのうちは、高橋家ではなく三田家になっていたわけです。高橋祐也という次男は、実際は三田祐也なんです。『三田』というのは芸名で、ある意味でフィクションです。本名かも知れないけれど、舞台の上での名前です。でも実人生の姓は「高橋」のはずです。あの祐也君も、奥さんもそうでしょう。だとしたら、やはり父親として、「代理」などと言わないでほしかった。大変な家族の問題ですから、何とか乗り越えてほしいと思います。

「人形の家」を引き合いに出した理由は、『家族熱』がその百年前の作品をもとにつくられたものだとお話ししようと調べているうちに、この事件が起き、高橋家もやっぱり家長不在だったのだと思ったからです。

今日の日本の社会では責任を取らない家長がふえつつあります。この和敬塾の皆さんはそうなってほしくない。将来、結婚するパートナーには、やはり進んで協力し、子供たちへの愛と責任を持つそういう家長になってほしい。ということで私の話としてはここで終わりにしたいと思います。

これから、皆さんと、一体、ホームドラマにとつて家族って何かとか、話し合っていきたいと思えます。ホームドラマというのは一番テレビに適したメディアだと思います。そのホームドラマがなぜ、テレビで人々に好まれるのか。それはやはり戦後の一般の人々が、家族というものに大きな関心を持っているからでしょう。そういう長い五十年近い歴史の中での家族のあり方の移り変わりとか、それから家族における父親の役割とは何か、そういうことを皆さんと話し合えればと思います。そして、私のほうは逆に皆さんからいろいろな感想を聞いて勉強できればというつもりです。(拍手)

●平原 では、何かぜひこういうことを言ってみたいという方がいらつしやいましたら、どうぞ。私に答えられる範囲でお答えいたします。

●質問 質問が二つあるんでよろしいでしょうか。まず、演題にある「現代」の意味についてお伺いしたいと思います。先生はお話の中で、イプセンと向田邦子における共通点を軸にお話しされたと思います。百年を経て、男女関係のつながりをとらえて、私たちの家長制とは何かという話をされたということだと私は受け取りました。

では先生の言われる「現代」というのは、単に「コンテンポラリー」という意味ではない、ほかの意味があるのでしょうか。演題に「現代」とつけたその意味についてお願いします。

●平原 大体、近代というのは産業革命をつくり出しましたね。それ以後、やはり近代家族というものができてくる。産業社会が生まれてくるわけですから、それまでの家族は農業が主ですから、農業というのは労働力の問題で大家族が多いですね。近代以降、特に都市労働者がだんだんふえてくる。核家族化していくのは産業革命以後ですね。それはそのまま今日に持ち越していると思います。産業社会における家族の形態というのは、大体、十九世紀末から二十世紀にかけても、ほぼ形態的には同じです。

それと、私が言いたかったことは、『人形の家』と百年後の向田邦子のドラマで、やはり家長という意識は、同じようなかたちで今日まで持ち続けているという構造も半分あると思っております。そうではない人も大勢いますけれども、まだ日本の中年世代以上では、特にそういう傾向があると思います。そういった意味で、その辺は厳密には説明しませんでしたので「現代」という大まかな言い方をしました。

●質問 ありがとうございます。

もう一つあるのですけれども、今の社会で真の家長がいなくなったというお話でしたが、家長というのが江戸時代から始まる家長制の流れの家長であれば、最近の流れは男女の共同参画もあつて、家長制とはちがつてきているなと思ったりもします。すると先生の言われた家長というのはどういう意味なのでしょう。

●平原 さつきも少しお話しましたが、私はそれについては、明快にこうあるべきだと言いきりません。ただ、今あなたもおっしゃったように、男女共同参加型社会というのは、やはり役割分担をしていかななくてはいけないのではないかと思います。以前のようには、男性上位で、女性が下位に立つというような構造ではなしに、役割分担をしていくということです。

例えば育児の問題でも、これからは男性もしなくてはならない。大体、今までの考え方では

育児という問題は女性のものだというふうに決めつけてきてしまっていたわけでしょう。でも、そういう考え方も変えていかななくてはいけない時代が来るだろうということは、わかりますね。ですからその役割分担をきちんとして、妻と夫が話し合える、そういう共通の和、対話を持ち得るということがまず根底に必要なんじゃないかなというぐらいにしか、私は今わかりません。でも、そういうことをベースにしない限り、実現しないだろうということです。

●質問 こんばんは。先生のご家族についてのお話は非常におもしろく聞かせていただいたんですが、私は東京学芸大学に在籍しております、専門に福祉を勉強しております。先生のお話とまた別な観点からなつてしまいかもしれないですが、二〇二〇年から人口の半分以上が六十歳以上の高齢化社会というようになつていになりまして、私は福祉のほうの勉強で老人保健施設のほうに行きまして、いろいろとお話を伺つてきたのですが、家族でもご老人をどうしても養うことができなくなつてくる状態というのが現実にあるようです。

家族のほうで、ご両親がむしろ苦痛になり、ストレスもたまつて、殺人のようなことも起きているような状態です。それなのに老人ホームは、実は二年待ち、三年待ちというような状態

でして、これからどんどん若者が少なくなっていく、老人がふえていく。そういうような日本のかたちになっていくようでありませう。

その場合に、先生として、高齢化社会の問題について何かお考えをお持ちでございましたら、具体的な解決策や、これから私たちがどういうふうなものを考えながら高齢化社会に対応していくべきだということがありましたら、一言お答えをお願いいたします。

●平原 私には福祉の専門家ではないのですけれども、今度、埼玉県立医科大学で福祉をやっている先生たちとの共著の本が出ます。私は原稿用紙百枚ぐらいの割と長い論文を書きました。私は、介護の現場の先生たちとは同じレベルで介護の問題は語れませんので、「芸術表現に見る福祉」というテーマで、小説では、例えば森鷗外の『高瀬舟』のような芸術作品や、私の専門はテレビドラマですから、テレビドラマに描かれた福祉の問題について書きました。

例えば『高瀬舟』です。これは皆さんもご存じのように、一人の罪人が島流しに遭うんだけれども、理由は、自分の弟が病気で苦しんで、かみそりでのどをかき切ったが、死にきれずに断末魔のところへ兄がやってきて、弟が「これで自分の首を切ってくれ。血がどろどろ出て、苦しんで仕方がないから」と兄に頼みます。そのとき、兄は弟のかみそりを抜こうとして、誤

って頸動脈を切って、弟は死ぬわけです。それは、安楽死の問題とつなげてよく話題になる問題なんです。それは果たして殺人罪かというようなことを書いたわけです。

ご質問のような、高齢化社会における老人介護のありようとは直接結びつかないけれども、私たちの前には確実に高齢化社会が待ち受けています。そして、若い世代は、そういう人たちの費用を賄わなくてはならないといういろんな問題点が言われていますね。そうすると若い世代は、経済的な側面からだけ言えば、最終的には非常に荷厄介に感じてくると思うんですよ。そして経済的な観点で言えば、老人というものを非常に厄介な邪魔な存在と見るような風潮に行くでしょうね。経済的な側面だけからいくと、人間というものをだんだん蔑視していかざるを得なくなっていく。

だから、そこには老いるということの悲しみというものを、我々はどういうふうに受け入れなくてはいけないのだろうか。若さというけれど、それは当然老いというものを前提にした上での若さであり、大いなる人間学といえますか、人間が生きるという問題をもっとと深く考えていかなくてはいけない。

それは純経済的な側面とか社会政策的な側面だけでは、老いの問題というのは絶対に処理できないと私は思う。それにはやはり文学であ

り芸術であり、思想・倫理の問題として、人間というものを考えていかなければならない。そうしないと、社会全体、人間精神全体の退廃がおきてくると思います。

ですから、私は答えというものは持っていないけれども、今後高齢化社会を考えていく上で、我々は文学とか、芸術とか、倫理とかそういう問題を深く考えていかななくてはいけないと思う。社会的な問題と合わせてね。私は、特效薬的なことは何も言えないけれども、現時点ではこういうことしか答えられません。

●司会 これで質疑応答のほうを終わらせていただきます。では平原先生が退場なさいませう。拍手をもつてお送りください。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。